

六十八 園丁と蝶の対話余録 認識の先にある「宗教」という公案

園丁 お久しぶりです。また会えましたね。あなたとお話してみたいことが出てきて、会えるのを待っていたのです。

莊周 そうですか。わたしが役に立つことがまた出てきましたか。それはわたしにとつて喜ばしいことです。君のお相手をして、問答するのはいいことだと分かりましたからね。それで、どんなことですか。

園丁 あのあと、新訳の『カント全集』の一冊として『単なる理性の限界内の宗教』という書物が出版されるという案内が目にとまり、三つの批判書のあとに宗教をどのように論じることができるのだろうか、関心をもちました。でも、読む人は少ないのでしょうか、本の値段が高いのです。それで、手元に残らないけれども、県立図書館からとり寄せて読みました。そこでのカントの議論を忘れてしまわないように、また、あなたに話し相手になってもらって、僕の頭を整理したいのです。

莊周 まだ前の問答の余韻が君に残っているんですね。その話題は、認識と言語を巡って考えた「理性」について補うところがありそうですから、時機を得たものになるかもしれません。

れません。

X 「単なる理性の限界内の宗教」

園丁 カントは、『批判』によつて人間理性をそれまでの伝統的な考え方から解き放ちました。しかし、なお観念論者にとどまつた古い人だという漠然とした評価になっているように感じます。たとえば、ニーチェは、「神や魂や自由や不死といった人間を閉じ込める檻をこじ開けたのはカントの力と賢さだった」と評価するけれども、「自分の開けた檻にふたたび迷い込んだ」ととらえました。あなたとの対話の第五話補遺でも触れたことですが、カントが、神のさまざまな存在証明が不可能なことを論じたのに、そのあとも、人間理性がつくりだす「神や魂や自由や不死」といった観念を考察したことを責めているのです。でも僕は、そこでも言ったように、理念に潜む自己矛盾を批判的に解決するために、統整的原理を置きそれを経験的に使用することを提唱し、自然必然性と自由の問題などを宇宙論的理念の中に納めようとしたただけだ、と考えます。カントは、人間の口について出る永遠や不死などの言葉、人間が善と考えようとするものに敬意を表わし、彼岸にその理念を望見して人間の理性が秩序を失うことを避けようとしたのだ、

と思います。

莊周 君が考えているようにカントさんがその立場をくずしていないのなら、また、あれほどの人が考えぬいたことを変えるとも思えませんから、君が今日話題にしたいことから特別新しいことが知られるとも思えません。

園丁 そうかもしれません。ですが、今も宗教は、社会で大きな力をもっていて、人間の言動を左右するほどの影響力をもっています。立派な業績を上げた人や尊敬に値する人が宗教について発言する言葉を聞いて、僕は、疑問だと思う考え方を含んでいるように感じるがあります。現代人はいまだに宗教を十分に把握できていないのだと思います。

莊周 宗教を把握するというような言い方は、本当に信じている人の態度と相容れないでしょう。

園丁 その言葉が適切でないとしても、現代人の多くは宗教を深く考えたことがなくてあいまいな態度をとっていると言えるのではないのでしょうか。だから、カントの『単なる理性の限界内の宗教』を読むことには現代的な意味がある、と僕は考えたのです。宗教というものをどのようにとらえればよいか理解が深まるだろう、と。

園丁 この書物は、保守的なしめつけの厳しかったプロイセンで検閲の問題に直面しながら書かれたのです。読んでいて晦渋な感じがしたのはそのせいかもしれません。読んでみると、敬虔な宗教的態度に寄り添って綿密に議論する文章が続き、森に迷って何がカントの主張なのか区別しにくいほどです。この書き方が検閲に対して有効だったのでしょうか。

一七九三年の第一版序文は、「なすこと・なさざることを何に向ければよいのだろうか、そして何をすくなくともそれに一致する目的とすればよいのだろうか」という問いを発して、「世界における最高善の理念は、道徳に端を発する」と判断します。そして、「道徳が宗教にいたるのは避けられず、道徳により人間以外の力をもった道徳的立法者という理念にまで拡大される」ことになる人間理性の現実を見つめます。しかし、「神なるものはある、世界における最高善なるものはある」という命題は、道徳から分析的には展開されえないのです。カントは、『理性批判』で到達した原則をけっして放棄することはありません。

莊周 そうですねー、ええ。それでもカントさんは、そこで終わることができなくて、人間の現実を自分に引きつけるようにして切実に議論を進めずにはおれないですね。

園丁 はい。「すべての人間は、法則において純粹理性の準則を守りさえすれば、それで十分だといえよう。道徳的ななすこと・なさざること一切の結末、それが何なのかを、どの人間も知る必要があるか。それは世界の成行きが招き寄せることである。義務をなすこと、それだけで人間には十分である。たとえこの世の生命がすべて終わっても、しかもほかならぬこの世の生命においては、幸福と幸福にふさわしいことがひよっとして一度も合致しえないかもしれないにしても、それで十分なのである」、と分かっている、人間には、…行為の成果を顧慮するということがある…、目的は実行においては最初に来るのである。…そこに人間は自分の愛しうるものを求めるのである。…、法則は愛しうるもののために拡大されて、理性の道徳的な究極目的を規定根拠のうちに取り入れるようになる」のです。「あらゆる行為にたいして法則以外にも、さらに目的を考えざるをえないという人間の自然的性質」があるのです。

そういう思索を綿々とめぐらせて、カントは宗教発生の現実を理解しようと努めます。検閲に大いにわずらわされて、それに対応するためにもってまわった論陣を張っているようにも見えますが、どうなのでしょう。

莊周 そういうことであの人が自分の考えを曲げるとは思えません。でも、カントさんはヨーロッパのキリスト教世界で生を受けて、幼少から敬虔なプロテスタントの家庭

に育って身についたものを失っていないので、考察する宗教の精華と言えるものはやはりキリスト教のものです。君は仏教の影響から自由ではないので、その議論に抵抗なくついていくことはできなかったのではないですか。

園丁 ええ、その指摘は当たっています。僕は、原始仏典に表現されているゴータマ・シッダールタの思想はのちに仏教となった宗教とはちがうと考え、宗教としての現代仏教を敬遠しますが、そういう立場はいつそうキリスト教の人格神と向き合う信仰と異なるので、カントの議論のとおりに考えるわけにいきませんでした。しかし、カントが理想的な宗教を考察するのに、その精髓とするヨーロッパ的・キリスト教的よき態度に共感しなかったのでもありません。

それを考察していくカントの議論をうまく話題にすることができません。第二編と第三編は省略しましょう。キリスト教に寄り添って、むしろキリスト教の考え方に従って論じていくので、その議論はカントの主張のように聞こえますが、第一編の最後の（第二版の）補足は、カントの理性についての了解が揺らいでいないことを示しています。僕たちの対話「認識と言語を巡って」で考えた理性についての認識を変える必要はないということです。

莊周 それがこの書物から得た君の結論ですか。君は、理性についてのその考え方に基づいて宗教に接しようと言うのですね。

園丁 一般に受け入れられている道教は宗教的なものですが、莊周さん、あなたは宗教的なことを言っていないません。僕もそうしようと考えるのです。

莊周 それはあなたの問題ですよ。

園丁 はい、そうです。ここで、第一編にあった一般的な注解の言葉を引いておきましょう。「人間は道徳的な意味において何であろうと、何になるべきであろうと、善にせよ悪にせよ、人間はそれに自分自身でなるにちがいない」、「人間の道徳的形成は道徳的慣習の改良からではなく、むしろ考え方の転換と性格の確立とから始まらねばなるまい」と言います。カントは、外的な条件が人間の行動に影響するとしても結局はその運命を自分で選びとるのだと考えて、主体性と責任を放棄しないし、自分のあり方を実践的な問題と考えます。

莊周 そう覚悟を決めなければ、自分を変えていくことはできません。ものごとが自然に生成すると思えがちな君やわたしに足りない考え方ですね。

園丁 第四編は教会を論じて、純粹理性宗教と言えるものを提示します。ここでの既存宗教と教会に対する批判は厳しいものです。「時とともに教会信仰を不要にできる原理」をふくまなければならないとし、「ツングース族のシャーマンから、教会や国家を同時に治めるヨーロッパの高位聖職者にいたるまで、…洗練されたピューリタンや独立教会派にいたるまでのあいだには、信仰の流儀にはいちじるしい隔たりがあるにしても、その原理に隔たりがあるわけではなく、そもそも原理に関していえば、彼らは同一の部類に属している」という大胆な表現があります。これらの文章を抹殺できないほどカントへの尊敬があったということでしょうか。

莊周 それほど啓蒙の時代は進展していたということでしょう。それに、続けてカントの言う「もっぱらよき生き方の心術にのみ礼拝を見出す気である人々だけが、彼らと区別されるのであって、区別は彼らとはまったく別の、そして彼らの原理よりもはるかに崇高な原理への、すなわちよき考えの人々すべてを包括する教会、またその本質的な性質からいつて真の普遍的教会でありうる唯一の（不可視の）教会、これへの信仰告白をする理由となるような原理への超出によりなされるのである」という言葉を否定することは困難ですからね。

園丁 カントが代わりに推奨する純粹宗教信仰は次のようなものです。

—— 一つの実践的認識が存在しており、これはひとえに理性にもとづいていて、歴史の教えを必要とはしないのに、誰にでも、このうえなく愚直な人にでも、まるで人間の心情に文字で銘記されているかのように明々白々なのである。すなわちそれは一つの法則であって、その名をいさえすれば、威信については、誰とでもすぐに合意できるものであるし、また何人の意識においても無制約な拘束性を伴っている法則であるが、それは道徳性の法則にほかならないのであって、そのうえこの認識は、それだけですでに神への信仰に導くか、あるいはすくなくとも、それだけで神の概念を道徳的な立法者の概念として規定するかのいずれかであり、したがってこの認識は、どんな人にとっても、最高度に畏敬すべきでもある純粹宗教信仰にも導くのであって、それどころか、それへの導き方がきわめて自然なので、試しにやってみれば分かるように、この宗教信仰について何ひとつ教えられていなくとも、いかなる人からでも、それをすっかりそのまま聞き出せるほどなのである。—— と。

カントは、『実践理性批判』で提起したあの「道徳法則」だけを推奨するのです。

莊周　じつに単純な法則だけでも、それは、凡人が体得して実践しがたいほどの指針ですね。

園丁　ええ……。

園丁　どうしめくればよいのか判りませんから、随所に出てくる聴くべき有益な言葉をいくつか挙げておきます。

「人間性の尊厳は、人間が己の人格とその規定という点で崇敬しなくてはならないものである」…、

「自分の足で立とうとする勇氣には和解の教えが続き、これによっても勇氣は強められるのであるが、それはこの教えが、変えることのできないものともう済んだことなのだとし、ついで新しい生き方にいたる道を開いてくれるからなのである」……、

「良心とは、それ自身だけで義務であるような意識である。私たちのあらゆる表象の意識が必然的だと思われるのは、論理的意図においてだけであり、したがって私たちの表象を明確にしようと思うならという制約の下でしか、必然的であるように思われなし、したがってそれが無制約に義務であるはずはな

いのに、どうしてそれ自身だけで義務であるような意識が考えられるのか？…
 …、行為がそもそも正しいのか不正なのかを判断するのは、悟性であって、良心ではない。考えうるあらゆる行為について、それが正しいか不正なのかを知
 ることは、絶対に必要だというわけでもない。しかし私が企てようと思ってい
 る行為は、それが不正ではないと、私が判断し思いなすだけでは十分ではなく、
 それが不正ではないことを、私も確信していなくてはならないのであり、しか
 もこの要求は良心の要請である……、このことについて理性は自らを裁き、そ
 してこのようになされた、あるいはなされなかったということに関して、理性
 に賛成なのか反対なのかの証人として人間を立てるのである……。

園丁 尻切れトンボになりますが、これ以上対話が続ける種が尽きました。とにかく、
 今の僕は、人間の理性についていくらか知ったと思いますから、宗教には頼らずに、
 用心しながら自前の精神を働かせてやっていくしかないだろうと考えます、カントが
 勧めるよき生き方に務めることをおろそかにせずに。

園丁 うーん。頼りないけれど大丈夫ですか。
 ……

二〇一八年、四月